

特集◆◆◆◆「海技の伝承」 救命筏の基礎知識

◆ 船員の命を守る ◆⑤ 生き抜くために必要な「救命いかだ」の知識

洋上を航行する船舶には海難に遭遇した場合に備え、命を守るための救命艇や「救命いかだ」などが設備されており、万が一の不幸な事態を避けるため、救命いかだに関する知識は必要不可欠である

サバイバルで生還するための知識と技術 -陸地発見法と着岸-

接 岸

陸岸に近づいても、風や、海流に押し流されて着岸できないかも知れない。このことは十分頭の中に入れておかないと、気を落として今までの航海が無意味にしてしまうことがある。

陸地は海よりも昼間暖められやすく、夜冷えやすいから、午前中は海から陸に向かって風が吹き、夕方になると陸から海へと風が吹くものである。だから午前中はシーアンカーをしまいこんでなるべく岸の方へ押しよせられるようにし、夕方になったら海の方へ押しかえされないようにシーアンカーを入れる。

オールは、ほとんど陸岸に近づいた場合のみに使用しよう。

ゴムボートは、オールでなかなか進むものではないから、極めて岸に接した場合以外には用いても効果がない。

救命艇でも、島のまわりには潮の流れがあったりしてなかなか陸地に近づくことは難しく、ただ、疲れと、いらだたしさと、絶望のみが起こってくる場合がある。こんなとき、元気な人が、ロープをもって泳いで陸岸に達して、陸上の適当なものに結びつけたロープをたぐりながら上陸した例はたくさんある。

陸地が見えても、興奮していろいろの注意を忘れてしまってはならない。陸地にあまり期待してもならない、波が高く上陸できないかもしれない。高い磯波を越えて上陸するのは相当に困難だ。やむをえない時を除いて夜の上陸はしない方がよい。

もし、海岸に人の気配があるなら、まず合図を試みよう、号笛やその他のいろいろな方法を用いて助けを求めた方がよい。

熱帯地方なら島のまわりにさんご礁があるから注意しよう。さんご礁には必ず切れ目があり、このようなところは磯波がたっていない。もし太陽光線がまぶしくて、通路になる切れ目が見にくいなら、しばしの間をかけて見えるまで待とう。太陽が頭上にあるか、背後にあるときが一番よい。